

著：坂井 建雄
図説 医学の歴史

書評者：北村 聖(地域医療研究所シニアアドバイザー)

同級生の坂井建雄教授が2年余りの歳月をかけて『図説 医学の歴史』(医学書院)という渾身の一冊を上梓した。坂井氏の本業は解剖学である。学生時代から解剖学教室に入りびたりの生粋の解剖学者である。卒業後、それぞれの道に専念し接点があまりなかったが、再度会合したのが医学史の分野であった。聞くとところによると、ヴェサリウスの解剖学から歴史に興味を持ったそうであるが、私が読んだ「魯迅と藤野厳九郎博士の時代の解剖学講義」の研究は秀逸であった。2012年に坂井博士の編集による『日本医学教育史』(東北大学出版会)が出版されて以来、より親しくさせていただいている。坂井博士は恩師養老孟司先生と同様、博学であると同時に、好奇心に満ちている。自分の知りたいことを調べて書籍化していると感じる。

さて、本書は表題が示している通り写真や図版が多い。特に古典の図版の引用が多いが、驚くなかれ、その多くは坂井博士自身が所

有されている書籍からの引用である。2次文献ではなく、原則原典に当たるといふ姿勢は全編を貫く理念であり、それが読む者を圧倒する。まさしく「膨大な原典資料の解説による画期的な医学史(本書の帯)」である。また、史跡の写真も坂井博士自らが撮影したものが多く、医学史の現場にも足を運んだことがよくわかる。また、書中に「医学史上の人と場所」というコラムが挿入されており、オアシスのような味わいを出している。内容もさることながら、人選が面白く、医学史上の大家から市中の名医(荻野久作など)までが取り上げられている。

本書は4部26章からなっており、第1部は「古代から近世初期までの医学」、第2部は「19世紀における近代医学への変革」、第3部は「20世紀からの近代医学の発展」、そして、第4部は「医史学について」である。特に2部以降の近代、現代医学史は、原典を丁寧に読み込み、社会科学・歴史学というより自然科学の手法でそ

の時代の医学を明らかにしていく姿勢が鮮明である。特に第15章「明治期の日本の医学」の記述は巻を圧するものである。また、第4部は日本医史学会の理事長である著者にしか書けないものであり、第25章「医史学の歴史」、第26章「現代における医史学の課題」共に、必読に値する。

歴史を学ぶことは、過去を振り返るだけの行為ではなく、過去の延長線上にある現代を理解し、そして未来を見通すことである。その意味において、本書が令和元年5月に上梓されたことは意義深い。医学史といえば長く小川鼎三博士の『医学の歴史』(中公新書、1964)であったが、半世紀ぶりに新しい定本ができたことを実感している。

● B5 頁656 2019年5月
定価：本体5,800円+税
[ISBN978-4-260-03436-4]
医学書院刊